



三洋半導体  
ニュース

No.581A

4219

LA3380

モノリシック FM 復調回路

PLL FM マルチステレオ復調器

新製品

開発ニュース No.581 とさしかえてください。

**概要** ・LA3380 は 高級 FM ステレオチューナ用として開発された 低ひずみ率、高 S/N の FM マルチプレックス ステレオ復調器用 IC である。外形は 20 ピンデュアル・イン・ライン・パッケージにおさめられ下記の機能、特長を持っている。

**機能** ・パイロット信号キャンセル機能内蔵(レベル追従型)。  
・左右独立のセパレーション調整可能。  
・最大出力電圧  $2 V_{rms}$  のポストアンプ内蔵。

**特長** ・低ひずみ率、高 S/N のプリアンプ、ポストアンプを使用した NF 型・チョッパタイプの復調回路を採用したことにより 下記の特長が実現した。

1. 低ひずみ率である : THD=0.01% typ (mono 1kHz 200 mV 入力)。
2. 高 S/N である : S/N=88dB typ (mono 200 mV 入力)。
3. 電圧利得が高い。

約 16dB(標準回路定数)の利得が得られ、最大  $2 V_{rms}$  を無ひずみで出力できる。また 外付け定数の変更により セットに合わせて利得設定ができる。

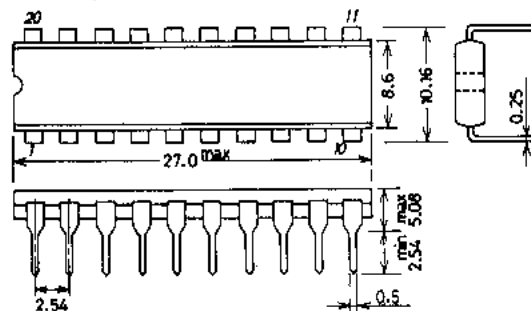
4. ループフィルタの改良により 高次周波数のビートひずみの改善。  
10 kHz ビートひずみ=0.05% typ main。
5. 出力レベルのバラツキが小さい。

出力レベルは ほぼ 外付け定数で決まるのでバラツキは小さい。

最大定格/ $T_a=25^\circ\text{C}$			unit
最大電源電圧	$V_{CC \text{ max}}$	16	V
ランプ駆動電流	$I_L$	40	mA
許容消費電力	$P_d \text{ max}$	$T_a=60^\circ\text{C}$ 650	mW
動作周囲温度	$T_{opg}$	-20~+75	$^\circ\text{C}$
保存周囲温度	$T_{stg}$	-40~+125	$^\circ\text{C}$
推奨動作条件/ $T_a=25^\circ\text{C}$			unit
推奨電源電圧	$V_{CC}$	12~14	V
入力信号電圧	$V_i$	200	mV

次ページへ続く。

外形図 3008  
(unit: mm)



※ これらの仕様は、改良などのため予告なく変更することがあります。

前ページから続く。

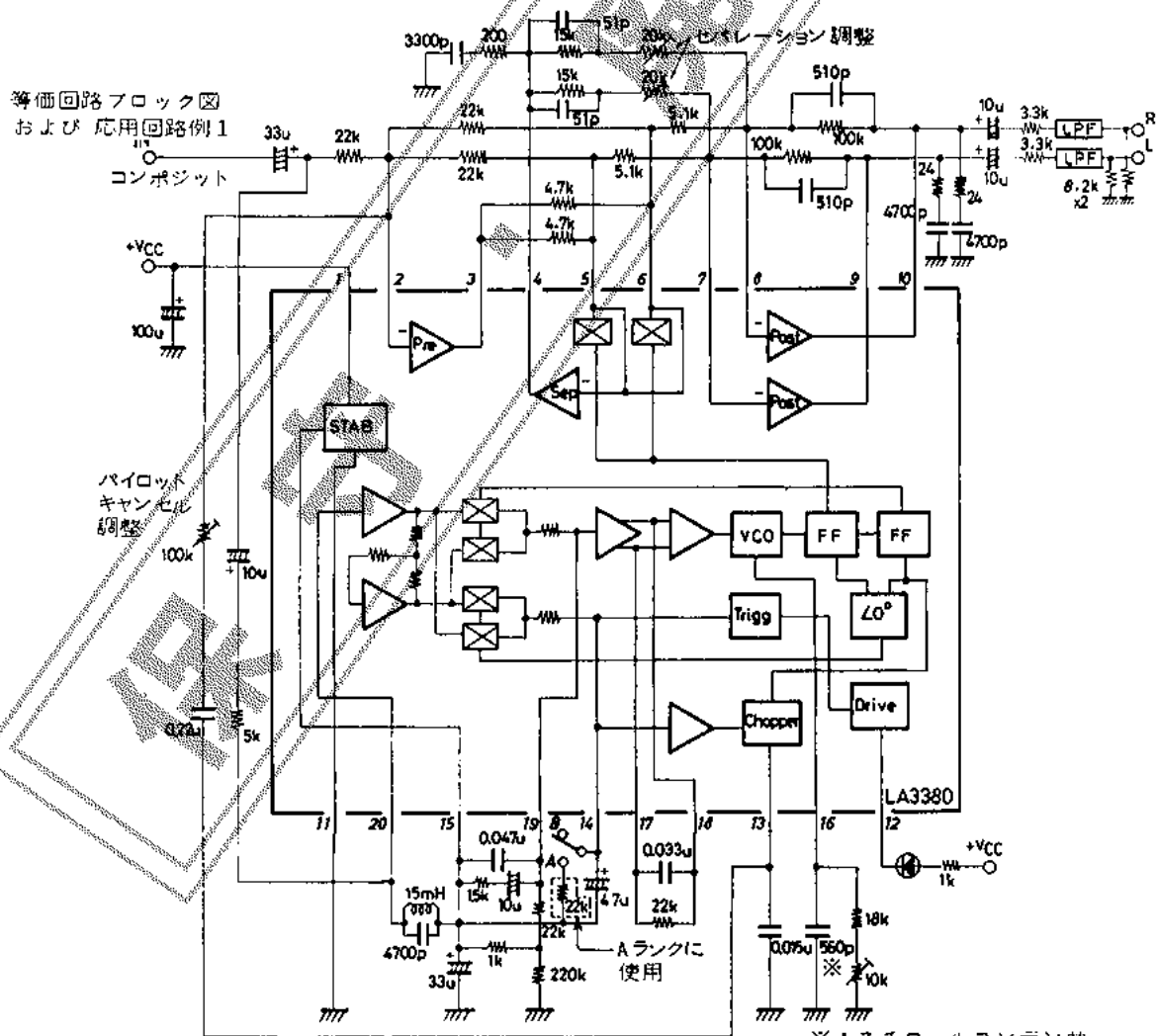
動作特性/ $T_a=25^{\circ}\text{C}$ ,  $V_{CC}=13\text{V}$ , 入力=200mV,  $f=1\text{kHz}$ ,  $L+R=90\%$ ,  $pilot=10\%$ , 指定測定回路 (応用回路例に準ずる)。

			min	typ	max	unit
無信号電流	$I_{OCC}$			30		mA
チャンネルセパレーション	$S_{op}$	10kHz		45		dB
		1kHz	45	55		dB
		100Hz		45		dB
ステレオひずみ率	ST THD (メイン $L+R=90\%$ $pilot=10\%$ )	10kHz		0.05		%
		1kHz		0.02	0.06	%
		100Hz		0.05		%
モノラルひずみ率	mono THD $f=1\text{kHz}$			0.01	0.04	%
ランプ点灯レベル	$V_L$ ※		20	45		mV
ヒステリシス	$h_y$			4		dB
キャプチャレンジ	—		$\pm 1.0$	$\pm 1.5$		%
19kHz キャリアリーク	—	キャンセル回路付 ディエンファシス		50		dB
S/N 比	S/N		60	68		dB
出力信号レベル	$V_o$	サブ $L+R=90\%$ $pilot=10\%$	800	1100	1400	mV
大入力ひずみ率	—	モノラル入力 400mV		0.2	0.5	%

※：ランプ点灯レベルは 次のように分類している。

A ランク：14-15 ピン 22k $\Omega$  付き, B ランク：14-15 ピン 抵抗なし。

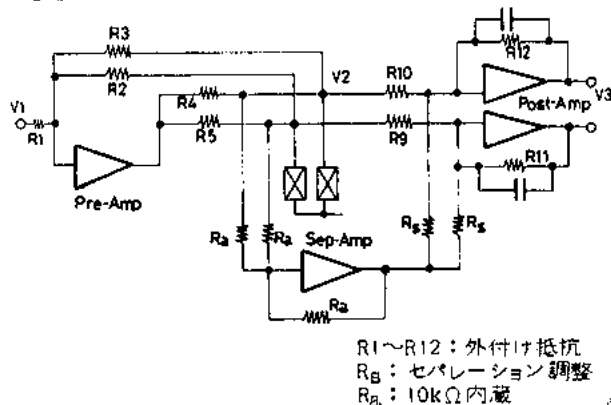
等価回路ブロック図  
および 応用回路例 1



※：スチロールコンデンサ

## 復調回路の利得について

復調回路はブロック図に示すとおり チョップパタイプの NF デコーダを採用したことにより 低ひずみ率、高 S/N を実現している。また 演算増幅器タイプのポストアンプを内蔵しているので 外付け回路定数によって利得を設定でき セットにあわせた設計が可能である。外付け回路による利得は下記のように設定できる。



- 1) ステレオ (sub) の利得計算は 下記のように外付け抵抗で設定される。

$$V_2 = \frac{R_3}{R_1} \cdot V_1 \quad (\text{or } \frac{R_2}{R_1} \cdot V_1, V_1, V_2 \text{ はピーク電圧とする}).$$

$$V_2 \text{ のサブ信号を復調すれば サブ信号レベルは } \frac{1}{\pi} V_2 = \frac{1}{\pi} \frac{R_3}{R_1} \cdot V_1$$

したがって ポストアンプのサブ復調出力は

$$V_{\text{sub}} = \frac{1}{\pi} \frac{R_3}{R_1} \cdot \frac{R_{12}}{R_{10}} \cdot V_1$$

また 応用回路では

$$R_1 = R_3 = 22k\Omega, R_{10} = 5k\Omega, R_{12} = 100k\Omega,$$

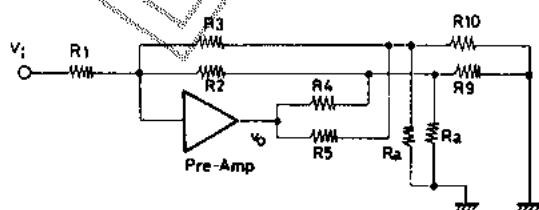
したがって サブ出力レベルは  $V_{\text{sub}} = 6.366V_1$  によって電圧利得は  $6.366 = 16\text{dB}$  となる。

- 2) セパレーションが最大になる セパレーション抵抗値は

$$R_B = R_{10} \cdot \frac{1}{\frac{1}{2} - \frac{1}{\pi}} \text{ で求められる.}$$

また  $R_{10} = 5k\Omega$  とすれば  $R_B = 27.5k\Omega$  となる。

- 3) プリアンプは mono モード時に ステレオ時と比べて倍の NF がかるので プリアンプの安定動作条件とダイナミックレンジを求めると 下記のようになる。mono モードでの デコーダの等価回路は下図のようになる。



プリアンプの安定動作条件として モノラルで  $V_0/V_1 > 1$  となるように 利得設定を行なう必要がある。

前図で  $R_g$  は セパレーションアンプの入力抵抗で  $10k\Omega$  が内蔵してある。この時  $V_0/V_1$  は

$$\frac{V_0}{V_1} = \frac{R_2 \parallel R_3}{R_1} \left( 1 + \frac{R_4 \parallel R_5 (R_2 \parallel R_3 + R_{10} \parallel R_9 \parallel R_g \parallel R_{11})}{R_2 \parallel R_3 (R_{10} \parallel R_9 \parallel R_g \parallel R_{11})} \right)$$

安定条件として  $V_0 > 1$  となるような  $R_4, R_5$  は

$$R_1 = 22k\Omega = R_2 = R_3, R_{10} = R_9 = 5k\Omega, R_g = 10k\Omega$$

とすれば

$$V_0 = \frac{11}{22} \left( 1 + \frac{R_4}{2} \frac{(11 + 1.67)}{11 \times 1.67} \right) > 1$$

よって  $R_4 > 2.89k\Omega$  であれば良い。

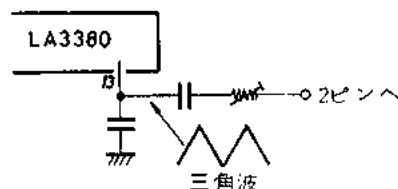
また 上式より  $V_0 = \frac{1}{2} (1 + 0.345 \cdot R_4) V_1$  となり  $R_4$  をむやみに大きくすると  $V_0$  が大きくなりすぎて クリップしてしまうため  $R_4$  は 下記の最大値以下にしなければならない。  $V_0$  のダイナミックレンジは  $6V_{pp}$  であるので

$$\frac{1}{2} (1 + 0.345 \cdot R_4) V_1 < 6V_{pp}$$

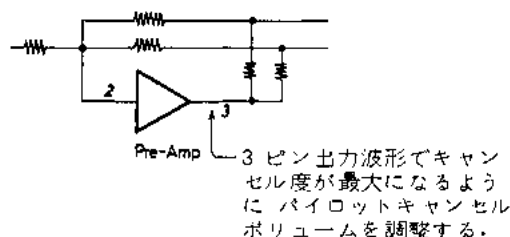
となるように  $R_4$  を設定しなければならない。

## パイロットキャンセル回路について

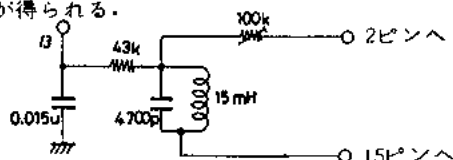
パイロット キャンセル回路は レベル追従型を採用しているので 一度あわせれば 放送局間でパイロットの変調度が異っていても 十分なキャンセルを行なうことができる。



キャンセル信号は パイロットレベルに比例した方形波を  $C, R$  で積分することにより 近似的な三角波として いる。したがって 高調波の位相ズレなどにより 多少のアンバランスがみられるが 調整をつぎのように行なうことにより アンバランスをなくすることができる。

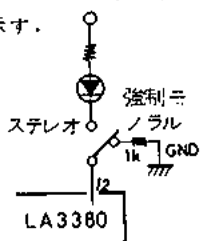


また キャンセル度を大きくするために  $Q$  の低い  $19kH_z$  の同調コイルを使用すれば  $70 \sim 80dB$  程度のキャンセル度が得られる。



## ・強制モノラルの方法

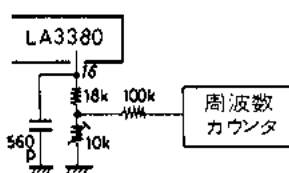
強制モノラルはステレオインジケータを切る方法で行なうことができる。強制モノラルの回路を下図に示す。



- ・強制モノラル時は 12 ピンを必ず 1kΩ を通して GND に接続する。
- ・ステレオインジケータ電流は  $10\text{mA} \leq I_{\text{st}} \leq 40\text{mA}$  に設定する。

## ・フリーランニング周波数調整

周波数カウンタ接続は下図のように タイミング固定抵抗と半固定抵抗の間から 100k $\Omega$  を通して 高インピーダンス入力のカウンタに接続する。



・ローパスフィルタ

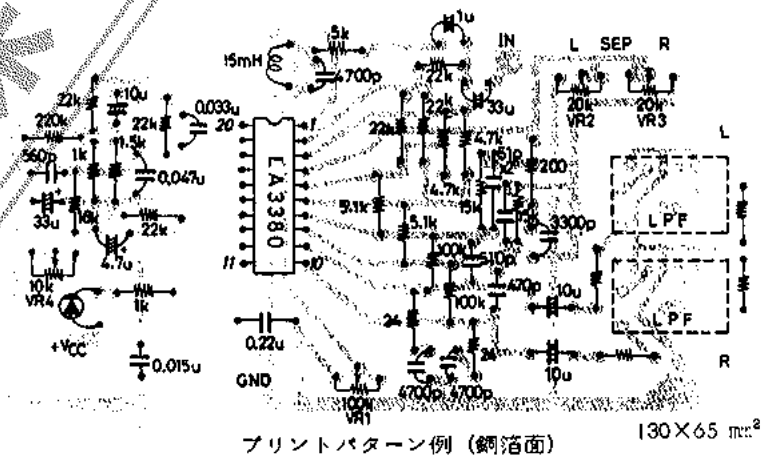
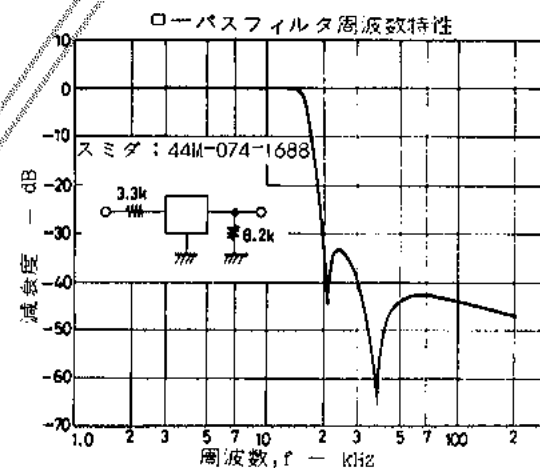
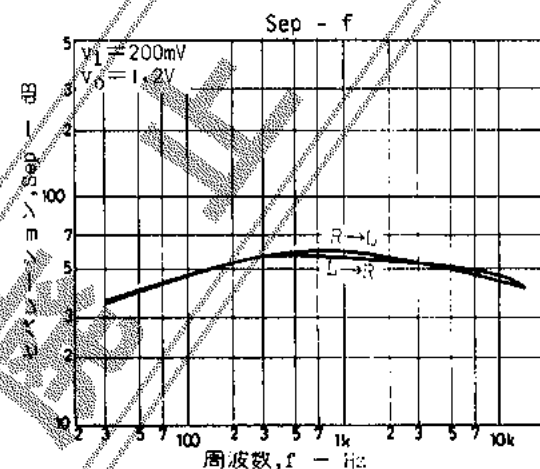
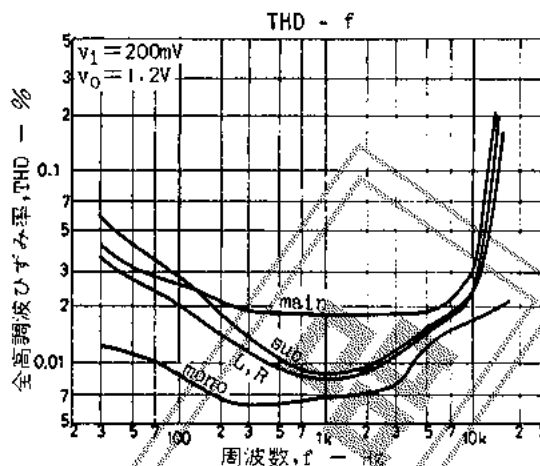
2 pole タイプのものとして スミダ M-20 がある。  
この特性を右下図に示す。

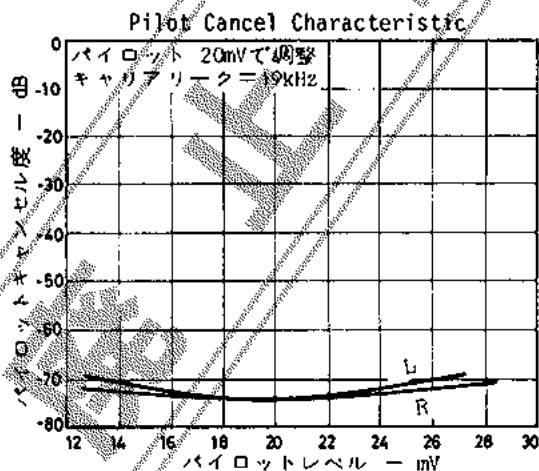
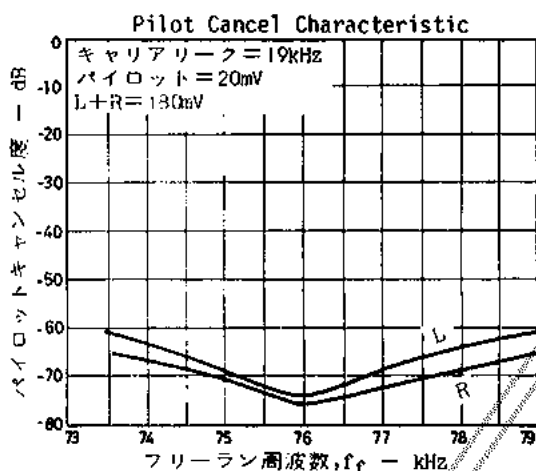
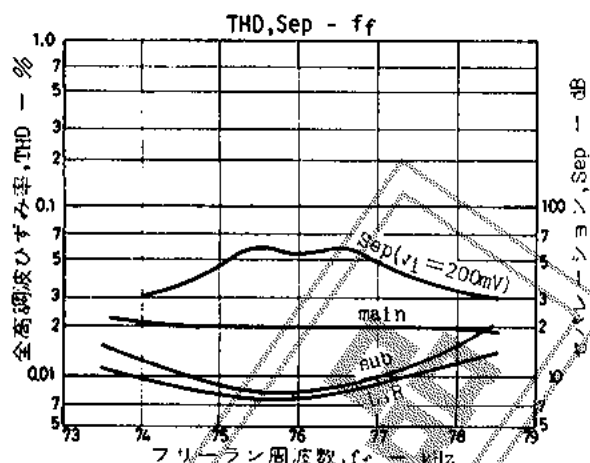
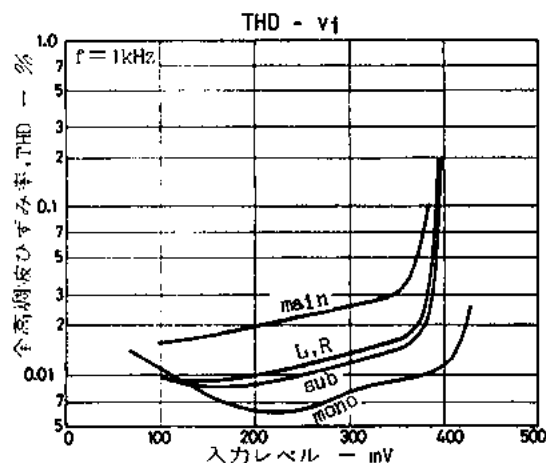
この時のキャリアリークは

19kHz	ローパスフィルタ	-17 dB
	パイロットキャンセル	-20 dB
	ディエンファシス	-16 dB
	1kHzに対する19kHzレベル	-20 dB
	計	-73 dB
38kHz	ローパスフィルタ min	-55 dB
	キャリアリーク	-35 dB
	計	-90 dB

・コイル仕様

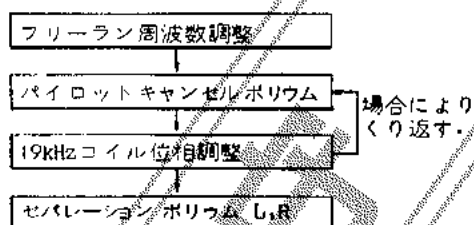
ローパスフィルタ	スミタ	4411-074-1688
	光輪技研	BL-2147
ループフィルタ	スミタ	4315-1005-032
	光輪技研	3-2756-01
	//	3-2756-02





## LA3380 の調整方法

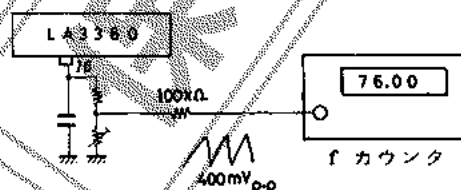
### 1. 調整順序は次のようにする。



### 2. 調整法

#### (a) フリーラン周波数調整

周波数測定回路は下図のようにする。



調整は 76.00kHz  $\pm$  50Hz 以内とする。

#### (b) 19kHz コイル調整およびパイロットキャンセルボリュームの調整

- まずパイロットのみ変調して入力を入れる。
- ステレオ インジケータが点灯する。

ピン3 の出力波形をオシロスコープで観測する。レンジは、V: 200mV/div., AC, H: 20 $\mu$ sec/div. とする。

もし 波形が



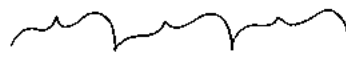
または



の場合は、パイロットキャンセルボリュームを回して、だいたい次のように調整する。



または

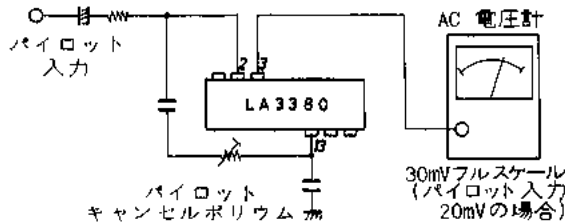


- 波形が上図のようなものであれば、19kHz のコイルを調整して下図のようになると入力パイロットと発振19kHz の位相が合う。



## (c) パイロットキャンセルの微調整

以上でおおよそのキャンセルが行なわれるがさらにキャンセル度を上げるために次のような調整を勧める。



パイロットキャンセルポリウムを調整して AC 電圧計の指示が minimum になるようにする。LPP の 19kHz の落ちが -17dB のとき出力の 19kHz リークは 約-73dB となる。

## ➤ (d) セパレーションポリウムの調整

以上の手順によって 19kHz の位相が合ったので最後にセパレーションの調整を行なう。LA3380 では L,R 独立に調整が出来るので各チャンネルで最大になるようにポリウム調整を行なう。

変調周波数は

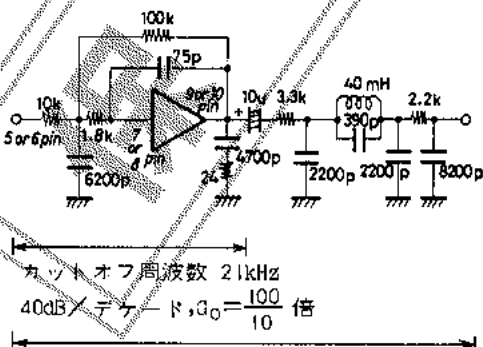
$f=1\text{kHz}$  でセパレーション最大に合わせておけば (≒ 60dB),

$f=100\text{Hz}$  で およそ 44~55 dB,

$f=10\text{kHz}$  で およそ 45 dB のセパレーションが得られる。

・ポストアンプをアクティブフィルタとして使用する場合。

7-9 ピン, 8-10 ピン間に オペアンプタイプのポストアンプを内蔵しているので これを使って アクティブフィルタを形成することができる。このようにすれば 後段の ローパスフィルタは コイル 1 個による 1 pole タイプの簡易形のものを用いて十分な ローパスフィルタ効果が得るので コストメリットが非常に大きい。以下に この応用回路とその特性データを示す。



カットオフ周波数 21kHz

40dB/デケード,  $G_0 = \frac{100}{10}$  倍

-21dB/19kHz

-74dB/38kHz (アクティブフィルタのATT=12dB)

ディエンファシスカークからのスレ $\approx$ -0.5dB/15kHz.

したがって 19kHz リークは

フィルタ, ディエンファシスで -21dB

パイロットキャンセル分 -20dB

1kHzに対する19kHzレベル -20dB

計 -61dB

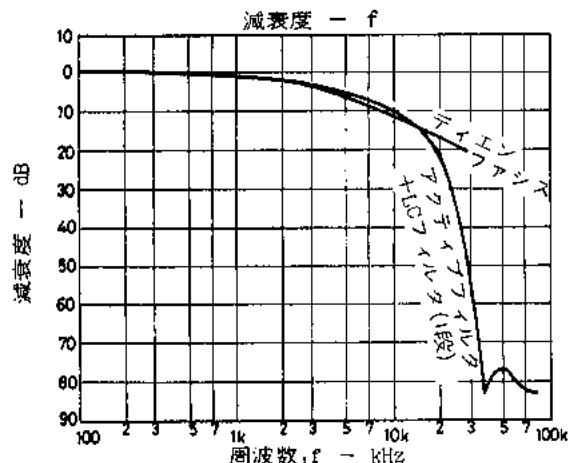
38kHz リークは

アクティブフィルタ出力 -30dB

LCフィルタ, ディエンファシス -56dB

計 -86dB

左図回路の特性を下図に示す。また このアクティブフィルタを使用した応用回路例を次ページに示す。



応用回路例2 : ポストアンプをアクティブフィルタとした場合

